（別紙２）

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　永 井 淳 一

本論文は，“負のプライミング”と呼ばれる現象について総合的な理解を試みたものである。負のプライミングとは，無視された先行刺激の影響によって後続刺激の処理が抑制さる現象である。

第１章では，負のプライミングについて、その合目的性と生起メカニズムという二つの観点から先行研究の論点を整理し，未解決の問題を指摘している。第２章では，文字の回転が，文字同定課題に必要な表象レベルでの干渉を低減するとの仮説を立て、負のプライミングと干渉を測定する実験を行っている。その結果，回転文字は文字表象レベルにおいて干渉しないために，文字同定課題では抑制を受けず，負のプライミングが消失した。すなわち，抑制は妨害刺激の干渉を防止し，標的の選択を効率化する合目的的な処理であることが示された。第３章では，親近性の高い刺激を用いると負のプライミングが大きいという知見と，新奇な刺激を用いると負のプライミングが大きいという知見がこれまで対立していたが、同一刺激を用いてそれぞれの結果を再現できることを示し、先行研究間の齟齬は課題の相違と配置の相違が複合的に影響したためであることを明らかにした。負のプライミングの生起には，刺激の内的表象の抑制メカニズムと入力表象の想起メカニズムの双方が関与していることが示された。第４章では，負のプライミングが内的表象の抑制・入力表象の想起という二つのメカニズムによって生起する可能性があり，内的表象と入力表象の概念は，“タイプ”と“トークン”の概念にそれぞれ対応していると考えられることから，負のプライミングの生起メカニズムとして，タイプの抑制・トークンの想起という二つのメカニズムを想定した仮説を提案している。

負のプライミングに関する研究状況は複雑であり，今後の課題として残されているものもあるが，本論文は注意や無視という視覚研究の基本的な問題において重要な貢献をすると認められる。以上の点から，審査委員会は，本論文が博士（心理学）の学位に値するとの結論に達した。